

【祈禱会奨励】「主が与えると誓った土地」 ヨシュア記1章、ウ信仰告白5:5 (9/22)

今日からヨシュア記の学びを始めます。なぜ旧約聖書かを簡単に確認します。旧約聖書はイスラエルの歴史が中心です。神によって神の民とされ、恵みの契約に入れられたイスラエルですが、罪を繰り返します。それでも主の恵みにより罪が赦され、主の約束が成し遂げられます。私たちが旧約聖書を読むことにより、私たち人間の持っている本質を顧み、主の御前に遜り、謙遜にさせられ、十字架を背負った歩みをするのが求められます。

旧約聖書はイスラエルのために記されており、私たちがすべてを理解することは困難です。しかし旧約の歴史の大きな流れを理解することは大切です。また一つひとつの出来事をとおして、神がイスラエルの民に訴えることが、現在に生きる私たちに対して訴える言葉として、私たちは聞くことが求められています。つまり私たちが旧約聖書を読むのは、昔の歴史を学ぶのではなく、私たちに語りかけている主の言葉に聞くことが求められます。

創世記は礼拝説教において聞き続けています。出エジプト記(～20章)と申命記は、説教要約集をお配りしています。そのため今回は続くヨシュア記を読み進めることとします。

最初にイスラエルの歴史を顧みます。罪を犯した民に対して、主なる神は洪水により全世界を滅ぼされました。しかし主はノアとその家族だけを選び、お救いくださいました。その後、主はアブラハムを召し、イスラエルを神の民として救ってくださいました。

その後、エジプトに下り奴隷とされたイスラエルに対して、主なる神はモーセを指導者として立て、一方的な恵みにより奴隷より救い出し、約束の地へと導いてくださいます。

そもそも主なる神がイスラエルに約束の地を与えることは、アブラハムへの召しに始まります(創世12:1-3)。主はアブラハムに40年後に奴隷から解放することも約束してくださいました(同15:13-16)。この主の約束は、エジプトで奴隷状態に陥ったイスラエルに、主がモーセをお立てくだり、奴隷から解放してくださることにより成就します(出エジプト3:7-10)。

モーセがカナンに偵察隊を遣わします(民数13-14章)。12名が遣わされますが、ヨシュアとカレブを除く10名は、カナンの住民に恐れ・おののきます。そしてイスラエルの人々は、主の約束を信じることができず、目の前の人々に恐れをいただきます。そのため、出エジプト時に成人していたイスラエルの民の中であって、ヨシュアとカレブを除くすべての者が、約束の地に入ることが許されず、40年に渡り、荒れ野をさまようこととなりました。40年の年月を経て、モーセも約束の地を前に地上の生涯を終え、約束の地に入ろうとする時に、ヨシュアが指導者として立てられます。ヨシュア記はこのことが記されています。

主なる神は、ヨシュアに語りかけます。「……あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、この民に継がせる者である。ただ、強く、大いに雄々しくあって、わたしの僕モーセが命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれではならない。そうすれば、あなたはどこに行っても成功する。……わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる」(5-9節)。主なる神がヨシュアにお語りになるこの言葉は、イスラエルの民に対して、そして今に生きる私たちに対して語りかけられています。

この主の言葉をヨシュアがイスラエルの民に語りかけると、民は答えます。「我々は、御命令を行います。……いかなる命令であっても、あなたの口から出る言葉に背いて、従わない者は死に定められねばなりません。どうぞ、強く、雄々しくあってください」(16-18節)。ここでヨシュアやイスラエルの民に求められたことは、主なる神を信じ、主の御言葉に聞き従って歩むことです。目の前の権力、目で見えているものに恐れを抱くことは、主なる神の御力を信じていない証拠です。旧約のイスラエルの民も、そして現在に生きる私たちも、同じ理由で神から離れ、罪を繰り返すのです。

私たちは、どうしても目に見えることが気になり、また恐れます。しかし、私たちは今、イスラエルに働きかけ、生きて働き、キリストの十字架の御業により私たちの罪を赦し、救いへとお導きくださった主なる神を知ること、主の御言葉に聞き従うことが、求められています(参照:ウエストミンスター信仰告白5:5)。主なる神は、インマヌエル、私たちと共にいてくださいます。主により頼み、主により頼んで歩み続けることこそが大切です。

ヨシュア記は歴史の流れからすれば、約束の地を前にしたイスラエルが、先住民カナンの人々を滅ぼし、約束の地に入っていくことが記されています。このことは、イスラエルが原住民を征服することを意味しています。新約の時代に生きる私たちが、これらの主の御業をどのように読み、私たちに語りかけられた福音を読み取ることが求められています。

ヨシュア記2章では、二人の斥候をエリコに送り出すことが記されています。「斥候」とは古い日本語ですが、「偵察、スパイ」と訳し直した方が分かりやすいかと思えます。

彼らが活動拠点として選んだのが遊女の家でした。遊女は多くの人たちが出入りすることにより、カモフラージュすることができるの考えからだっただけでしょう。しかし私たちは主なる神の真意を確認していくことが求められています。

一方、エリコの町の人たちは、イスラエルの大群が、対岸まで迫ってきていることを知り、恐れています。そして二人の斥候が入ってきている知らせが王の所に入ります。王は、遊女ラハブの所に二人がいることを突き止め、人を遣わし斥候を引き渡すように求めます。この時、ラハブは二人をかくまいます。これは咄嗟に言葉が出たとか、二人と結びつきが深かったというよりも、ラハブは二人がイスラエルから遣わされて来ていることを知り、イスラエルと共におられる主なる神が示されての、信仰に基づく行為でした(8-11)。

ラハブはイスラエルに働いた主なる神の存在を受け入れています。信仰とは、自分から求め、獲得するものではなく、主なる神からの恵みとして与えられます。ラハブに与えられた恐怖、主の御力は、主なる神から聖霊を通して与えられたものです。「選びの民がかれらの魂の救いのために信ずることができるようにされる、信仰という恵みの賜物は、かれらの心の中におけるキリストの霊の御業であり、……」(ウェストミンスター信仰告白14:1)。

彼女は、主なる神が全世界を治め、支配し、救いをお与えくださることを信じます。彼女には御言葉ではなく、主の霊の御業として信仰が与えられたとあって良いかと思えます。

そして彼女は、続けて救いの懇願を行います。主なる神が、救いの御業も成し遂げてくださる神であることが示されていたからです(12-13)。

最初にも確認しましたが、ラハブは遊女でした。エリコの町の人々が、主なる神を知らず、神の御言葉に聞き従わなかった人たちとして、主の裁きに遭いますが、彼らの目からしても、遊女は罪人でした。救いにふさわしくない存在であったと言って良いかと思えます。しかし主なる神は、信仰を告白し、救いを懇願するラハブを、二人の斥候により、主による裁きから救いだしてくださることを約束してください。

そして、イスラエルがエリコを占領するにあたり、エリコの人々が滅ぼされていく中、ラハブとその家族の救いは成し遂げられます(ヨシュア6:22-25)。神の救いの約束は、破られることはありません。主なる神が信仰を与え、信仰告白し、主に依り頼んで生きる者に対して、主なる神は、救いをお与えくださいます。それは神が前もって、罪の赦しと救いをご計画され、恵みの契約を結んでくださっているからです。私たちは、主なる神から示された信仰を、ラハブのように純粋に告白し、神に救いを求めることが求められています。

その証拠として、このラハブと家族の救いは、新約聖書において三度にわたり証言されていることから、大切なことを理解していただけるかと思えます。

最初は、マタイ福音書1章のイエス・キリストの系図です。この系図は男性が中心ですが、5名の女性の名が記されています(タマル、このラハブ、ルツ、ウリヤの妻(バティシュバ)、マリア)。そうした中、異邦人であり、遊女であったラハブが書き記されています。主なる神の救いは、異邦人にも開かれており、それも罪人に数えられている人々であっても、主の導きにより、救いに招かれていることを明らかにしています。

2番目がヘブライ11:31です。このヘブライ書11章では、旧約聖書において、主が救いへと導いてくださった信仰者の名を挙げて、私たちの信仰のあり方を告白していますが、その一人として、ラハブが語られています。

最後がヤコブ2:25です。ここで「同様に」とありますが、アブラハムと並べて記されています。ヤコブ書では、信仰に伴って行動することの大切さを語っています。ラハブの信仰に基づく行動に関して、新約聖書は、私たちにもそれに倣うように求めています。

イスラエルの民は、モーセの時代にヨルダン川東側に入り、ルベン族・ガド族・マナセの半部族の土地として与えられました。そして、イスラエルの民は、いよいよ約束の地であるカナン地域、つまりヨルダン川の西側に入ろうとしています。

ヨルダン川は普段は徒歩で渡れるような浅瀬です。しかし4月の刈り入れ時から5月にかけて、レバノン山系の雪解け水で水量は増加し、川を渡ることは不可能です⁽¹⁵⁾。つまりイスラエルの民は、自分たちの力で約束の地に入るこのできない状況に置かれています。こうしたことは、私たちの日々の生活の中でも起こることです。自分の力では不可能なことをやるのが求められます。こうした時、私たちは主なる神への信仰が問われます。

このとき主なる神は、主が共におられることを、契約の箱によってお示しになります。出エジプト時に、モーセが十戒を授かった後、主なる神はイスラエルに幕屋を建設することを求められました。このときに、モーセが授かった十戒の板を、契約の箱に入れ、そして神の臨在の場として、幕屋の中心・至聖所に置くことを求められました。その後イスラエルの民は、40年間、荒れ野でさまよいますが、常に、契約の箱がイスラエルの民の中心に座し、主なる神が共におられることを覚えることができました。

主なる神は、この契約の箱をレビ族が担ぎ、最初にヨルダン川に入って行くことを求められます。契約の箱との間に2000アンマ(900m)の距離をとることを求めます⁽⁴⁾。多くのイスラエルの民が、主なる神が先導されることを見ることができるようにするためです。

イスラエル人一人ひとりの力でヨルダン川を渡るのではありません。ヨシュアの力でもありません。主なる神の御業として、ヨルダン川を渡るのです⁽⁵⁻⁶⁾。ヨルダン川の水は堤防を越えんばかりに満ちています。その水が分かれ、契約の箱が通っていきます。そしてイスラエルの民が渡る道が開かれていきます。

ここにいるイスラエルの民は、出エジプトを始めた時、20歳以下か、まだ生まれていません。しかし、出エジプトは、主の御業として成し遂げられたことが、イスラエルの民に繰り返し教えられてきていました(申命記6:6~9)。そのため出エジプト時にあった、葦の海の奇跡を、誰もが知っていました(出エジプト14~15章)。しかし出エジプトの出来事は、今のイスラエルの民にとっては過去のことであり、信仰が抽象的になり、現実味を失っていました。ですから契約の箱が最初にヨルダン川に渡り、水が分かれることを見ることにより、イスラエルの民は、改めてここに主なる神がおられ、働いておられることを知るのです。

イスラエルの民は、主なる神が直接働いてくださることにより、主なる神の存在を知り、信じるのが求められました。しかし、新約の時代に生きる私たちは、イスラエルの民のように、直接神の御業を見ることができません。しかし主なる神は、「本性の光」つまり、聖霊をとおして私たちの心に働きかけてくださることにより、また、聖書の御言葉によって、ご自身の存在、そして御力をお示しになります(ウェストミンスター大教理問2)。そのため、新約の時代に生きる私たちは、主がお語りになる御言葉に聞かなければなりません。

主なる神は、生ける神です⁽⁹⁾。天地万物を創造され、アブラハムの時代にも、イサクの時代にも、ヤコブの時代にも、モーセの時代にも生きておられる神です。ですから、主なる神がモーセを召し出した時、神はモーセに「わたしはある。わたしはあるという者だ」とお語りになりました(出エジプト3:14)。過去におられ、今おられ、そして未来にあっても常におられる存在です。別の言い方をすれば、永遠から永遠に生きておられる神です。

この生きておられる神が、イエス・キリストをこの世にお送りくださり、十字架により、私たちの救いの御業を成し遂げてくださいました。この生きておられる神が、今も、私たちに支配しておられます。

時間的に永遠の神は、空間においても無限の神でもあります。そのことから全地の主であると語られます⁽¹³⁾。ウェストミンスター大教理問答問7 神は、どのようなお方ですか。答 神は、存在・栄光・幸い・完全性において、自立自存で無限の霊であり、まったく充足し、永遠、不変で、理解し尽くすことができず、どこにでもおられ、全能で、あらゆることを知っておられ、最も賢く、最も清く、最も正しく、最も憐れみと恵みに富み、忍耐強く、慈しみとまことに満ちておられます。

【祈祷会奨励】「これらの石は何を意味するの？」ヨシュア記4章、ウ大教理問129（10/13）

イスラエルの民は、ヨルダン川を渡りました。彼らは、エジプトを脱出した40年前のことは、知らないかほとんど記憶にありません。そのため、主なる神が生きて働かれるという実態の伴わない思弁的な信仰者になっていました。そのため、40年前の葦の海の奇跡を彼らは知っていましたが、ヨルダン川を渡ることにより、実体験し、その結果、生きて働く主なる神を信じ、また指導者であるヨシュアを受け入れることができました(14)。

今日の御言葉では、ヨルダン川にある石を運ぶように命じられます。「石を一つずつ肩に担ぐ」(5)ため、小さな石ではなく、比較的大きな石であったかと考えられます。持ち帰った12個の石は野営する場所に据えました(8)。9節の翻訳は理解できません。新改訳2017では「これらの12の石はヨルダン川の真中で、契約の箱を担いだ祭司たちが葦をとどめた場所にあったもので、ヨシュアがそれらを積み上げたのである。それらは今日までそこにある」と訳しています。この方が筋が通っているかと思えます。

ここで主が記念の石を置くように命じているのは、彼らの信仰のためではなく、彼らの子・孫・子孫の信仰のため、つまり信仰の継承のためです(6-7)。実際に主なる神の御業を知らない、あるいは実感が無い子どもたちにとって、神さまを信じることは、簡単なことではないためです。

ここにいるイスラエルの人たちは、出エジプトという40年前の出来事を、自分たちがあまり知らない思弁的な信仰になっていました。ウェストミンスター大教理問129は「目上の人々に求められているのは、…、〔第一に〕目下の人々を愛し、そのために祈り、祝福すること、〔第二に〕かれらを教え、助言し、諭すこと、…」と語られており、「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。更に、これをしるしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい」(申命記6:4-9)と教えられてきました。また、荒野野において日々与えられるマナ・ウズラの肉、そして水は当たり前で、生きた信仰となっていませんでした。

信仰が思弁的になり概念的になると、信じていると言っても、礼拝生活を中心とする生活における実践が伴わない信仰となります。ヤコブ書において語られていることです。これこそが信仰の継承の問題です。これは私たち人間の持っている弱さから来ています。言葉だけでは十分に伝わりません。そのため主なる神は、アブラハムの時代に、神の民であるしるしとして割礼を施すように求められました。割礼のしるしを見ることにより、神の選びの民であることをイスラエルは確認したのです。しかしこの割礼も、出エジプト以後に生まれた人たちは、割礼も受けていませんでした(5:5)。

つまり主なる神は、耳で聞くだけではなく、しるしをとおして体験することにより、信仰が伝えられるとお語りになります。ウェストミンスター大教理問129は「〔第六に〕、まじめで、賢く、清い、模範的な態度によって、神には栄光、自分たち自身には名誉をもち、かくして、神が自分たちの上に置いておられる権威を保つこと、です」と語ります。年長者は言葉で教えるだけでなく、信仰の証しし、福音を着飾ることが求められています。

私たちは、主がお与えくださるしるしを大切にすることが求められています。聖餐式を継続的に行うことが大切です。形骸化にも注意しなければなりません。御言葉の説教が、耳で聞く説教であると語られるのに対して、聖餐式(主の晩餐)は、五感で味わう説教と語られます。目でパンとぶどう液を確認し、手で持ち、舌で味わいます。こうすることにより、十字架でキリストが裂かれた体、流された血を顧み、キリストによる罪の赦しを、私たちは、確認することが求められています。

私たちが子どもたちへの信仰の継承を考える時、①主がお与えくださった洗礼・主の晩餐としてのしるしをしっかりと守ること。②御言葉・教理を語り伝えること。③信仰の実践を行っていくこと。その上で、教会において神さまが共にいてくださることが示され、子どもたちの居場所があり、安らぎが与えられる場所を提示することが求められています。

荒れ野の40年を経てイスラエルの民はヨルダン川を渡り、約束の地カナンに入りました。前回は、記念して石を積み上げるように求めました。これは、主なる神の御業を忘れないためのしるしです。しかしこのしるしは、あくまでも主の一つの御業を覚えるだけです。

約束の地に入ったイスラエルの民に対して、主なる神は割礼を施すように命じられました。エジプトから出て来た民は割礼を受けていたが、エジプトを出た後、途中の荒れ野で生まれた者は一人も割礼を受けていなかったからです(5)。

割礼とは、創世記17章において主から託された礼典です。「わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたの子孫の神となる。わたしは、あなたが滞在しているこのカナンのすべての土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。わたしは彼らの神となる。」(創世記17:7-8)。契約とは恵みの契約であり、救いの約束です。そもそもイスラエルが神の民となる、私たちがクリスチャンとなるのは、私たちの側がそれを求め勝ち取ったものではなく、主がお与えくださった恵みであり、それが神によって恵みの契約として与えられるものです。

割礼の場合、男性の包皮に傷をつけることにより目で見て確認できます。恵みの契約の清いしるし(サイン)、証印(シール)です(ウェストミンスター信仰告白27:1)。神さまが救いの契約書を作ってください、それにサインし割印を押してくださっています。神の御業はこの恵みの契約に基づいて救いが行われる一環で行われ、永遠に破られることはありません。ですから、この契約を私たちの側で破棄することはできず、神が破棄されることもありません。

イスラエルの民にとっては、やっと約束の地に入り、これからの時です。少しでも先を急ぎたいかと思えます。しかし主なる神は、このときに割礼を受けるように求められます。民は全員割礼を受けた後、その傷が癒えるまで、宿営内の自分の場所にとどまることが求められます(8)。特に成人した者が割礼を受けると、傷の痛みがあり、しばらくは何もできないのです(参照:シケムでの出来事・創世記34:25-26)。

しかし主はイスラエルの民に対して、この痛みを伴うしるしを受けること、そしてしばらくここに留まることを求められました。その理由は、イスラエルの民が約束の地に入り、自由になり自分たちで収穫の実りも得ることができるようになると、彼らが主なる神を忘れることは明らかだからです。そのため、痛みにおいてしばらくこの場に留まり、そこに残るしるしにより、主なる神の永遠の契約を忘れてはならないことが示されたのです。

このとき、主なる神は「エジプトでの恥辱を取り除いた」(9)とお語りになります。アブラハムの時代に与えられた割礼は、エジプトで奴隷状態の中でも継続されてきていましたが、形骸化していました。その割礼が、今与えられました。割礼を受けたイスラエルの民は、今、主なる神とのまじわりを取り戻し、滅び行く人間につかえていた恥辱から解放されたのだと、主は宣言してくださいませ。

新約に生きる私たちは、水の洗いとしての洗礼を授かっています。私たちの罪・滅び行く体は、キリストが十字架によって贖ってくださいました。洗礼は、割礼のように身体に傷をつけ、いつまでも残るものではありません。しかし、父・子・聖霊の三位一体の神の名において洗礼を授かったことは、神の恵みの契約、つまり永遠に与えられる神による救いに組み込まれたことを意味しており、死にゆく罪の奴隷からの解放です。

そして主は、割礼を施されたイスラエルに対して過越に与るように求められます。割礼が施されたことを前提として、毎年繰り返す過越に与ることにより、神による救いが確実に行われることを、イスラエルの民は確認することが求められます。

私たちも来月から聖餐の礼典が再開されます。礼拝において聖餐が行われないのは、礼拝としては片手落ちです。礼典としての聖餐が行われることにより、私たちに与えられた救い・恵みの契約における罪の赦しと永遠の生命を確認することが求められます。

最後にウェストミンスター信仰告白27:1から、主がお与えくださった聖礼典の恵みを確認します。聖礼典において私たちは、①キリストの十字架による罪の赦し、②救い(天国における永遠の生命)が与えられていること、③私たちがキリスト者(神の子)とされていること、④信仰生活・教会生活を送る者とされていることを、確認することです。

【祈祷会奨励】「主の御業としてのエリコ占領」ヨシュア記5:13～6章、ウ信仰告白2:1 (10/27)

主が、直接ヨシュアの前に特別な形で現れてくださった顕現が記されています(5:13-15)。主なる神は、大切な御業を開始される時、顕現してくださいませ。主はペヌエルにおいて、ヤコブの前に現れ、ヤコブと格闘してくださいませ(創世記32:22～32)。このときヤコブは、兄のエサウと再会する前であり、ヤコブにとっては大きな転機を迎える時でした。出エジプトを行うに際して、燃える柴において、モーセに現れてくださいませ(出エジプト3章)。このとき、主は「わたしはある。わたしはあるという者だ」と語られ(3:14)、また、3:5の言葉が、ヨシュア5:15において繰り返され、主が顕現されたことを指し示されています。

ヨシュアは今、主の語られる言葉に耳を傾け、行動するよう決意させられます。

こうしたことは新約聖書でも語られます。主イエスの誕生に対して、ヨハネの父ザカリア、そしてイエスの母マリアに天使が現れました(ルカ1章)。また、主イエスが十字架に架かれ死と復活を予告された時、イエスが変貌を遂げられました(ルカ9:28～36)。

イスラエルがエリコに入るに際し、原住民が立ちはだかります。エリコはイスラエルの人々の攻撃に備えて城門を堅く閉ざしていました(6:1)。このことは2:7から変化していません。イスラエルに立ち向かおうとしなかった(5:1)のは、イスラエルへの攻撃は行わないだけで、主なる神への頑なさには変わりありません。主なる神は、斥候を送って以来、エリコに罪の悔い改めと主への信仰を求めましたが、それが適えられていません。そのため主なる神は、イスラエルにエリコの町を滅ぼすように命令されます。

新約に生きる私たちに、主なる神が顕現され私たちに直接命じられることはありません。しかし主は、いつも聖霊を通して共にいてくださいませ。そして、私たちの祈りを聞き、私たちを主の御心にかなうように導いてくださいませ。このとき、直接主から命じられることはありませんが、時には親しい者の言葉により、あるいは祈り求めていた道が何らかの形で開かれていくことにより、主は私たちを導いてくださいませ。だからこそ私たちは、大きな決断をするとき、あるいは新しい道を歩み始める時、勢いで進んでいくのではなく、立ち止まり、主に祈り、主に判断を委ねていくことが求められています。

主は、「ことごとく滅ぼし尽くす」(「聖絶」(新改訳))ことを求めます(17)。旧約聖書では、カナンの原住民を聖絶するように繰り返し語られます。聖書がこのように聖絶を語る時、神を信じていない人たちは、「恐ろしい神」と語ります。また、キリスト教国の為政者達は、この旧約聖書の御言葉から、現代においても「聖戦」を肯定します。しかし、旧約聖書で「聖絶」が語られる時、主なる神は、彼らが主を信じることはなく、悔い改めないことを知っておられます。その上で、主の裁きが完全であることを聖絶においてお示しになります(ウ信仰告白2:1最後)。主の裁きは絶対的であることを私たちは忘れてはなりません。その一方、新約の時代、主の裁きは猶予されています。主は、主を受け入れ、悔い改める時を待っておられます。そのため現代では、キリスト者が「聖絶」を語ることは非常に慎重でなければなりません。ウェストミンスター信仰告白23:2では、合法的戦争を認めています。しかしこれは、主なる神を信じることにより、虐げを受け、迫害・虐殺にある時、いわゆるゆ抵抗権において許されているのであり、積極的に戦争が肯定されていません。戦争を行う前に、徹底的に平和的に和解を行う努力が求められています。

ヨシュア記6章は、最後で土地を探った二人の斥候を救ったラハブとその家族たちの救いについて語ります(6:22)。主は、ことごとく滅ぼし尽くすように命じつつも、主なる神を信じた者は、忘れられることなく、救いをお与えくださることを、ここで示しています。このことは、日本に生きる私たちキリスト者への励ましが与えられる御言葉です。日本ではキリスト者が少なく、私たちは周囲の人たちの影響を受けてしまいます。それでもなお主の救いの約束を信じ、信仰を貫いて生きる時、主は祝福をお与えくださいませ。

主なる神は、主を信じる者とその家族を救ってくださいませ(使徒16:31)。そして聖書は、信仰を貫いたラハブを、キリストの系図に記すこと(マタイ1:4)、またその信仰を記すことにより(ヘブライ11:3、ヤコブ2:25)、彼女の信仰を伝えています。

主は滅び行く者に救いを提示して下さいませ。イスラエルやラハブが主の御声に聞き従ったように、私たちが主の御声に聞き従い、主の恵みに生きることが求められています。

ヨシュアが率いるイスラエルは、約束の地カナンに入りました。ヨルダン川を渡り、最初の町エリコも占領することができました。主なる神の御言葉に聞き従い、行動するとき、主は約束を果たしてくださいます。

しかし、主の命令・主の御言葉あなどるとどうなるのか、今日の御言葉によって明らかになります。エリコを占領するとき、主なる神は、エリコを滅ぼし尽くし、金・銀・銅器・鉄器はすべて主に献げ、主の宝物倉に治めるように命じられました(6:16b~19)。しかしアカンは主の御言葉に不誠実であり、主への捧げ物の一部を盗み取りました(7:1)。

人は隠れて行えば隠せ通せると思います。「これくらい大丈夫だ」との思いです。しかし主の御前に、私たちは何一つ隠すことはできません。主なる神は全知全能です。主の御前にあって、私たちのすべての行いは明らかにされ、口から出た言葉がすべて明らかにされ、そして心の中もすべて明らかにされます。

アカンの行ったことは、主なる神にすべてが明らかにされ、主はイスラエルの人々に対して激しく憤られます(1)。その結果が、アイへ攻め上っても敗北する結果を招きます。アイに偵察隊が遣わされ、「二・三千人が行けばいいでしょう」と言わせたのは、主によって彼らの目が曇らされ、正しい判断をすることができない状態に置かれていたからです。

このときヨシュアは神に訴えます(7~9)。嘆きの祈りといっても良いかと思います。このときヨシュアには、敗北の原因がアカンの行った罪の故であったことが知らされていませんでした。そしてヨシュアは、約束の地が与えられるとの主の約束が反故になることを恐れています。イスラエル全体の滅びさえ覚悟しています。

このとき主はイスラエルの中で罪を犯した者がいることを明らかにされます(10~15)。ここで注目していただきたい言葉が、「わたしが命じた契約」(11)と語れている言葉です。主はヨシュアを通して命令されたのですが、それは神とイスラエルとの間に結ばれた契約です。それは、主なる神を信じ、主の命令に従って行動する時、主は約束の地をお与えくださり、主の恵み・祝福に満たしてくださいという契約です。これは恵みの契約です。恵みの契約は、主なる神が一方的に恵みの契約を結んでくださり、神の恵み、キリストの十字架の故に、罪を赦し、神の民として救いの中に入れてくださることです。

しかし、主なる神を否定するかのごとくにあなどり、御言葉に聞こうとしないとき、主なる神は、その罪を明らかにされ、主の裁きが示されます。

ヨシュアは部族ごとにそのことを確認していきます(16-18)。主の意志が表れた結果、ユダ族のゼラの氏族、ザブディ家のミルカの子アカンが指摘を受けます。主なる神に、隠し事はできません。新約聖書においても主なる神をあなどった結果、罪が指摘され、主の裁きが行われたことが語られています。使徒5章のアナニアとサフィラです(使徒5:1~11)。

主は主をあなどる罪を明らかにされます。旧約のイスラエルの人々は、主からその罪が指摘され、主の裁きを逃れることができませんでした。新約の時代の現在、主なる神の存在がないかのごとく人々は暮らしています。しかし、主はすべてをご存じです。新約の時代、主なる神は、今、裁きを行われることはありません。そうした人々が、自らの罪に気づき、悔い改めることを求めておられます。それでもなお、自らの罪を悔い改めることなく、主なる神を恐れぬ人に対しては、最後の審判において、主の裁きをもたらされます。

主イエスは語ります。「人が犯す罪や冒瀆は、どんなものでも赦されるが、“霊”に対する冒瀆は赦されない。人の子に言い逆らう者は赦される。しかし、聖霊に言い逆らう者は、この世でも後の世でも赦されることがない」(マタイ12:31~32)。人間イエスに対して敵対していようが、悔い改めた時には主の赦しが与えられます。しかし「霊・聖霊」に対して、つまり主なる神の存在を否定したりあなどったりして、主の命令を疎かにする時、主の裁きを逃れることはできません。

だからこそ私たちは、主なる神が共におられることを受け入れ、主の御言葉に聞き従った歩むことが求められています。私たちが、主を信じ、主の御言葉に聞き従って歩むとき、主は、私たちが罪を犯したとしても、それを赦し、天国のすべての特権をお与えくださいます。主をあなどることなく、主の救いの恵みに感謝して、主に従って歩みましょう。

今までは1章ずつの学びを続けてきましたが、今日は8～12章を一つにして学ぶこととします。旧約聖書、特に歴史書を読み進む時には、そうしたことも必要かと思っています。なぜならば、旧約聖書に記されている地名、そして民族、王たちの一つひとつを確認することは、当時のイスラエルの民においては、非常に大切なことでありました。主なる神が、すべてのカナンの国々を征服し、イスラエルの民にお与えくださったことを、彼らは確認することができたからです。そして一つひとつの裁きのその原因は、彼ら自身の罪の結果、主が聖絶を命令されたことを忘れてはなりません。

しかし新約の時代に生きる私たちにとっては、ここに記されている国、民族、王を知りません。そのため、簡単に学ぶことが許されます。この箇所を読み飛ばして良いのではありません。主なる神がイスラエルに命じることにより、カナンの原住民を聖絶させたという事実を、私たちは理解しなければなりません。

つまり、イスラエルの民が主なる神の命令に従わない時には主の裁きもたらされますが(7章)、イスラエルが主の命令に聞き従う時、主はイスラエルに対して戦いに勝利を与え、約束の地をお与えくださいます。私たちは、聖戦とは何かに関してすでに確認して来ました。主なる神は、彼らが主なる神に逆らい続け、主なる神を信じることも、自らの罪を悔い改めることもないことを知っておられるからこそ、彼らに対して、審判を下されたのが「聖絶」の理由です。主なる神による罪人に対する裁きが絶対的です。そのため、主なる神は、滅ぼし尽くすことを求めておられます。

しかし、聖戦による裁きを繰り返し私たちが主からのメッセージとして聞こうとする時、どうしても疲れます。そして説教も単純になってしまいます。説教は主なる神が私たちに語りかけてくださる言葉であり、私たちは常に主の御言葉に耳を傾けなければなりません。主がお語りになる一言ひとことに聞き、耳を傾けることが求められます。そして説教者は、主のお語りになる御言葉を正しく語ることが求められます。しかし聞く側になれば、裁きばかり語られると嫌になります。説教は正しいことが語られていればそれで良いのではなく、聞く側の私たちが主がお語りになる御言葉の意図を理解し、今に生きる私たちが主の御言葉に従って生きる者となることです。そういう意味では聖書研究会において一語一語を確認し学ぶことと、説教とは異なります。ですから、説教は時として、大きなスパンで聞くこともあるのです。聖書概論に通じるものがあります。つまり、聖書全体、方向性を理解することにより、恵みの契約・信じる者に与えられる救いを確認することができます。

主なる神は、ヨシュアを指導者として立て、主の御言葉に従って行動するイスラエルに対して、約束の地カナンをお与えくださり、勝利を遂げてくださいました。このことを象徴することとして、10:12～14の御言葉が示されます。

「ヤシャルの書」とは、こことサムエル下1:18にのみ出て来ます。「正しい者の書」ということで、イスラエルではよく知られていた詩的文書と思われます。つまり、日と月が動きをやめることは信じがたいことですが、そのことが起こった事実を書物において伝えられており、そのことを聖書においても証言していると言って良いかと思えます。

ここで、太陽と月が丸一日止まり、そして時間が進まなかったことが語られていますが、このことに関して、神学者たちは色々なことを推測してきました。わたしの意見は、どのような奇跡が行われたのかを確定することが大切なのではなく、ヨシュアの祈りにより、主による奇跡が行われた結果、イスラエルが勝利を収めたことを受け入れられていることが大切かと思っています。

つまり今までも、主なる神からの命令をモーセやヨシュアが聞き、イスラエルがそれを信じて行動した時、それが成し遂げられてきたのですが、このことがヨシュアの祈りにより始まったのです。ですから、特別なことが起こったと解釈する必要はありません。

つまり私たちは、どうしても主なる神により奇跡が行われたり、ドラマチックなことが行われると注目してしまいますが、徹頭徹尾、裁かれていく人たち自身の罪を主が指摘し、その結果として主の裁きです。そのことが命令されたヨシュアとイスラエルの民は、主の命令に従った信仰の故に、神の民として受け入れられ祝福に満たされています。

【祈禱会奨励】「イスラエルに与えられた約束の土地」ヨシュア13～19章、ウ信仰告白7:4 (11/18)

イスラエルの民は、約束の地が約束され、カナンの原住民を滅ぼすことによって与えられようとしています。占領すべき土地はまだたくさん残っています(13:1)。しかしヨシュア記は、ここで占領の土地について詳細に語ります(参照:聖書巻末地図3)。その理由は、ヨシュアが年を重ね老人になったからです。ヨシュアは110歳で地上の生涯を終えますが(24:29)、この頃90歳位と考えられています。つまりヨシュアの働きは、約束の地に住む先住民を絶滅させ、占領することから、与えられた約束の地にイスラエルの民が住むために、民族毎に割り当てを行うことに移ったことを意味しています。現在においても、国境を定めるにあたり、二つあるいはそれ以上の国々の間で係争することが少なくありませんが、そうした係争が起こらないように、国境を確定させることは重要な働きでした。

まず13章にはイスラエルに与えられた土地の全体が示されます。そしてこれらはヨルダン川を挟んで2つに分けることができます。最初にヨルダン川の西側つまり地中海側です(13:2-7)。続けてヨルダン川東側について言及します(13:8-13)。ヨルダン川東側に関しては、マナセの半部族、ルベン族、ガド族の土地とされる所ですが、ヨルダン川を渡る以前のモーセの時代にすでに獲得していた土地です(参照:民数記32章、申命記3:12-17)。ここで語られていることは、その確認です。

マナセ族に関してですが、12部族の内、ヨセフに関しては、その息子たちであるマナセ族とエフライム族の2つの部族が土地を得ることが許されました。主なる神において12が完全数であり、主が与えられた土地は12の土地に分けられる必要があります。それでは一つ多くなりますが、レビ族には嗣業の土地が与えられませんでした(13:14、21章)。このことに関しては、改めて21章で確認しますが、レビ人は、自分たちが土地を持ち、収穫に与えることはなく、各部族の土地に住み、彼らに対して、生け贄を献げたり、主への奉仕を行うことにより、必要が満たされたのです。

そして14章以降、ヨルダン川西側の土地の分割が行われていきます。カレブに対して、優先的に土地が与えられました(14:6-15)。それは、モーセとカレブとの間に結ばれた約束の故でした(民数記14:24)。

そして15章以降ヨルダン川西側の土地が分けられていきます。まずユダ族が記されます(15章)。18-19章では7つの部族が氏族毎にくじを引いて分けていくのに対して、ユダ、そしてヨセフの二つの部族エフライムとマナセは、特別な形で記されています。ユダ族は、将来的にイエス・キリストにつながる特別な民族ですが、ヨセフの時代にあって預言されてきたことが成就した結果です(創世記49:8~12)。次にヨセフの子らであるエフライムとマナセについて記されます(16-17章)。ここもまた、ヤコブの言葉から確認することができます(創世記48:22)。そして18~19章には、最後に残された7部族に土地が分割されていきます(ベニヤミン、シメオン、ゼブルン、イサカル、アシェル、ナフタリ、ダン)。

このように、イスラエルは主が約束してくださった土地を手に入れることとなります。しかし、これらは主なる神のご計画に基づくものであり、この場で決めていったものではありません。つまりイスラエルと呼ばれたヤコブが最後を迎えた時、ヤコブは12人の兄弟たちを祝福しました(創世記48:21~49章)。そしてもう一カ所申命記33章では、モーセの祝福が語られています。これらの二つの祝福の言葉は、直接的にどの土地が与えられるのかということは語られていませんが、与えられる土地を暗示する言葉が、与えられています。

主なる神は、ヤコブの時代に、イスラエルの民をエジプトの奴隷として連れ出すときから、約束の地に連れ戻し、嗣業の土地を与える約束をしてくださっていました。主の約束は成し遂げられます。主なる神は、エジプトで奴隷であったイスラエルの民が、主の約束を忘れてしまった時でさえ、約束を反故にされることなく、約束を成し遂げてくださいました。新約に生きる私たちには、主なる神は、御子イエス・キリストの十字架の贖いにより、神の国における永遠の祝福を約束してくださっています。今の時代、私たちは目の前の生活に追われます。しかし、主が約束してくださっている御国を目指し、歩み続けることが求められています。

ヨシュアが率いるイスラエルは、主なる神から嗣業の土地、つまり約束されていたカナンの土地を手に入れ、そして部族毎に分けられました。

続くヨシュア記20章では、「逃れの町」について記されています。ヨシュア記のみを読んでいますと、「逃れの町」については初めて出て来ましたが、旧約聖書を最初から読んでいますと、繰り返し言及されてきたことです。

最初は出エジプト21:12～14です。出エジプト記20章において十戒が授けられ、その後、律法が具体的に語られていきますが、その場面で語られています。つまり殺人は死によって償うことが求められますが、故意による殺人ではなく、過失致死にあたる場合、殺されることはなく、復讐から逃れる場所が与えられることが語られています。

続けて民数記35章9節以降です。特に16節以降では具体的にどのような場合に過失致死が適用されるのかが語られていきます。10～15節では、カナンの土地に入るときに逃れの町を、ヨルダン川の東側に三つ、カナンの土地に三つ設けることが求められています。

申命記4:41～43では、ヨルダン川の東側の逃れの町が指定されています。ルベン領の台地の荒れ野にあるベツェル、ガド領ギレアドのラモト、マナセ領バシヤンのゴランです(→ヨシュア20:8)。さらに申命記19:1～13においても、逃れの町について語られています。

聖書が繰り返して逃れの町について語るのは、人の罪を奪うことが罪として非常に大きいからです。「あなたは憐れみをかけてはならない。命には命、目には目、歯には歯…」と語られています(申命記19:21)。罪を犯す者は、主の御前で裁きを受けなければなりません。しかし不可抗力(過失致死)において人を死なせた場合は、「命を奪ってはならない」と主はお語りになります。そして、この逃れの町にいる間、彼は守られます。

その一方で、彼は逃れの町を出ることが許されません。皆さまもコロナの期間中、外出できず、旅行に行けないことに対して、フラストレーションがたまっただと思います。彼もまた、裁判において過失致死が認められるまで、もしくは大祭司が死ぬまでは、町を出ることは許されません。つまり逃れの場が与えられたと同時に、忍耐も強いられます。罪において罰せられることはなくても、一人の人の命が奪われたことを心に留め、この重大性を顧みることが求められたのではないのでしょうか。

ここで一つ注目すべきことが6節で語られています。「その時の大祭司が死ぬまで、町にとどまらねばならない」と。時の大祭司が死を迎えることにより、彼は完全に罪から解放され、自らの居住地に住むことが許されます。これ以降、復讐が行われることは許されません。ここにおいて大祭司の死は、キリストの十字架による贖罪の前ぶりであると言われています。つまり大祭司の死により、彼はキリストによる贖いが成し遂げられたと宣告を受けたのです。大祭司の死において、主は彼に対する罪の赦しを宣言してくださいませ。

では新約に生きる私たちは、この御言葉から何を聞き取ることが求められるのでしょうか？ 主イエスは、山上の説教において、このようにお語りになります。「あなたがたも聞いておおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。……」(マタイ5:38～)。主は、罪を犯した者を赦すように求めておられます。私たちが罪を犯した者を裁くのではなく、彼らの裁きは最後の審判に委ねなければなりません。そして新約における現在で「逃れの町」はありませんが、罪を犯した者は、皆が逃れの町にいるのと同じではないのでしょうか。

そして旧約では、大祭司の死において、罪の贖いに与ることがゆるされますが、新約に生きる私たちは、キリストの十字架の贖いに与ることが求められます。聖書の御言葉に出会い、キリストの御業を受け入れ信じる時、私たちは彼らと同じように、罪の贖いに与り、罪が赦され、神の御国における生命に与ることがゆるされます。主は、すべての者が主なる神と出会い、罪を悔い改める時を待っておられます。

一方、罪を犯しつつ、自らの罪を悔い改めず、主なる神と出会うことができない人たちは、罪の贖いに与ることがなく、自らの罪の故に罪の刑罰としての主の裁きから逃れることができません(参照:ウ信仰告白33:2)。旧約のイスラエルの民に逃れの場所が用意されたように、キリストの再臨までの間、現在に生きる人たちには猶予の時間が与えられています。

エジプトを脱出し、40年間の荒れ野を彷徨ったイスラエルは、ヨシュアの時代、約束の地に入ることが許されました。そしてそれぞれの部族は、自分たちの嗣業の地が与えられました(13~19章)。そして、今日の御言葉21章において、嗣業の土地がまだ提示されていなかったレビ人に関して語られています。

新約に生きる私たちは、主を礼拝するにあたり、預言者の働きを行い説教を語る牧師、そして王の働きを行い教会を治める長老、祭司的な働きを行う執事が立てられています。しかし、キリストの十字架の贖いが成し遂げられる前と後では、礼拝形式がまったく異なります。旧約における神礼拝は、イスラエルに対して、異なる礼拝方式がとられました(参照：ウエストミンスター信仰告白7:5)。イスラエルの民には、祭司によるいけにえが中心でした。

そうした中、レビ人には主に仕える特別な働きが与えられました。従って、今日の御言葉を理解するためには、レビ人の任務に関して、私たちは理解することが求められます。

民数記1章では、出エジプトを果たした翌年、イスラエルに対して、人口調査を行うことが求められています。ここでレビ人に対する特別な働きが示されています(民数1:47-53)。

続けて民数記18章においても、レビ人に関する規定が語られていきます(18:20-24)。レビ族を除くイスラエルの他の民族は嗣業の土地が与えられました。嗣業の土地を持つことは、農作業に従事し、農作物の恵みに与ることです。しかし主は、レビ人が嗣業の土地をもってはならないと命じられます。幕屋における働き、神とイスラエルの仲保者としての働きが委ねられており、報酬はイスラエルの民から得ることを求めます。

このとき、「レビ人のみが臨在の幕屋の作業をし、その罪責を負わねばならない」のであり(23)、神に仕える働き人が、いかに人間的な働きではなく、主なる神に仕える働きであり、主なる神を汚す行為が行われた時、その罪責を担うべきかが示されています。

レビ人の中であって、祭司であるアロンの家系には、特別の働きが委ねられており、そのための報酬が約束されています(民数記18:25-32)。

こうしたことを確認した上で、今日の御言葉を読むことが求められます。レビ人は、嗣業の土地を持ちませんが、どこかに住む必要があります。彼らは各部族毎にいけにえを行うため、レビ人として一つの土地が与えられるのではなく、各部族の中に設けられました。それが、この21章において記されています。

レビ人の働きは、いけにえによりイスラエルの民に罪の赦しを与え、主なる神との和解を求める働きです(参照：ウエストミンスター信仰告白7:5)。そしていけにえは、主イエス・キリストの十字架の贖いにより、イスラエルの民の罪の赦しと救いが完成します。そのため旧約の時代には、繰り返しいけにえが献げられることにより、イスラエルに対する贖いが宣言される必要がありました。レビ人の働きは、そのための主なる神の御業に仕える大切な働きです。そのため、地を耕すことなく、主に仕える働きの報酬を受け取るにより、生計を立てるように命じられています。

新約に生きる私たちには、すでにキリストによる罪の贖いが与えられました。そのため、レビ人の働きはなくなりました。しかし、御言葉を取り次ぎ、人々に悔い改めを説き、罪の赦しの宣言と洗礼を授ける牧師の働きは、新約におけるレビ人と重なる部分もあるかと思えます。長老・執事の働きが、牧師の働きに劣るということではありません。しかし牧師は、基本、すべてを教会における働きを行い、教会から報酬を得るということで、レビ人に重なる部分があります。ですから牧師は、聖書を解き明かし、説教を語ることににおいても、自分の意見を語るのではなく、主なる神が聖書を通して語りかける言葉に聞き、語る言葉を獲得することが求められます。今、福音的な説教を語る牧師が減っているということも聞きます。そのため今日の御言葉より、牧師は、主の働き人として召され、神の民からの養いを受けていることを謙虚に聞くことが求められています。

それと同時に、教会に集う神の民であるキリスト者である皆さまも、主によって与えられた罪の赦しと救い、そして日々の養いが、主なる神が教会を通してお与えくださっていることを覚え、教会・そして牧師を支えることが求められていることをお覚えいただきたいと思えます。

モーセによって出エジプトを果たしたイスラエルの民は、40年の荒れ野を経て、ヨシユアによって約束の地カナンに入ることが許されました。13～19章においてそれぞれの部族に約束の地が与えられ、21章ではレビ人についても言及されました。ここにたどり着くまでイスラエルの民は、原住民と戦い、主の導きにより勝利を遂げ続けてきました。こうした戦いには、すべての部族の参加が求められ、すでにヨルダン川東側に嗣業の地が与えられたルベン・ガド・マナセの半部族からも代表が遣わされていました(参照: ヨシユア1:12～18)。しかし、すべての戦いは終わり、彼らも嗣業の土地に帰ることが許されます(4)。そしてヨシユアは彼らに対して、改めて言葉をかけられます。5「ただ主の僕モーセが命じた戒めと教えを忠実に守り、あなたたちの神、主を愛し、その道に歩み、その戒めを守って主を固く信頼し、心を尽くし、魂を尽くして、主に仕えなさい。」

しかしここで一つの問題となる出来事が行われます。彼らが大きな祭壇をつくったからです(10)。問題は、彼らが偶像礼拝への疑いです。私たちは最初にウェストミンスター大教理問答問109を問答することにより、第二戒違反とはどのようなことかを確認しました。偶像礼拝には、大きく分けて二つのことを考えることができるかと思えます。第一は、出エジプト記32章でイスラエルの民が金の子牛をつくったように、偶像をつくり、それを主なる神として礼拝することです。偶像をつくること、そして主が求めておられない方法で礼拝を行うことです。第二は、主なる神以外の神として偶像をつくり、拝むことです。

このとき、他のイスラエル部族の代表が、彼らの所に出向き、彼らが偶像崇拜の罪を犯したのではないかと指摘します(16)。そしてこの時に例としてあげたのがペオルでの出来事です(17, 参照: 民数記25:1-6, 16-18)。イスラエルの民はペオルにおいて偶像崇拜を行い、主の裁きにあいました。このペオルの罪は、詩編においても語られています(詩編106:28-31)。

こうしたことを覚えつつ、イスラエルの人たちは、さらに続けます(17-20)。イスラエルの人たちは、ヨルダン川東側の二部族と半部族の罪の故に、イスラエル全体が裁かれることを恐れます。

イスラエルにとって大きな問題が起きました。しかし彼らは、すぐに東岸の諸部族を「これは偶像崇拜だ」と決め、すぐに裁くことをせず、代表を送ります(12)。そして、自分たちが問題に思い、罪の故に裁きにあうのではないかと主張した上で、東岸地域の人たちにも弁明の機会を与えます。ここでは、①偶像崇拜を認めること、②言い逃れをすること、③実際には偶像崇拜ではない、のいずれかを立証することが行われます。

そして東岸の諸部族たちは、弁明します(22～29)。特に「神よ、主なる神よ。神よ、主なる神よ」(エル、エロヒーム、ヤーウェ、エル、エロヒーム、ヤーウェ)と非常に丁寧に繰り返して、主なる神を称えます。

彼らは、生け贄は、聖所において行われるべきことを理解していました(参照: 申命記12:13-14)。そして、自分たちがつくった祭壇で、生け贄を行われれば、主によって裁かれることを知っています。その上で、自分たちの子孫に信仰を受け継ぐために、主なる神を理解し、礼拝する場として、祭壇を作ったことを弁明します。

そしてイスラエルの民は、このことは主によって裁かれる偶像崇拜ではないと判断します。罪に疑われること、自分には受け入れられないこと、自分にとって都合の悪いことであつたとしても、すぐに「罪」と判断を下し裁くのではなく、反論・弁論の機会が与えられることが求められます。そうすることにより、主の真実を互いに確認し、罪のない者を裁くことを免れることができます。

ヨシュア記では、イスラエルが約束の地を占領すること、そして約束の地を12部族に分配することが語られてきました。ヨシュア記、そしてヨシュアの働きはここで終わろうとしています。そして23章・24章では、次の世代へ信仰が引き継がれようとしています。

ヨシュアは多くの日を重ね老人となりました(1)。ヨシュアの生涯は110年であり(24:29)、その最晩年の言葉がここに記されているとあって良いかと思えます。人は地上において築いた権力・財産を永遠に持つことはできません。主の働きのために遣わされた者も、地上の教会をそのままに保つことはできず、次の世代に受け継ぐことが求められます。

先日、東京恩寵教会福井召一長老が、同教会牧師であった榊原康夫先生について、「伝道者・牧師 榊原康夫—資料で見る人と思想—」を送付してくださいました。教会形成、神学、そして一人のキリスト者としての榊原康夫先生について、長老個人の受け止めを含めて記されています。私たちは、一個人を賞賛することはしません。しかし、主なる神が賜物を与え、知恵を与え、主の御業が成し遂げられた姿を、私たちは一個人の人生を通して確認することができます。私が一番印象に残っていることは、「牧師、そしてキリスト者は、主の御業・福音宣教の邪魔をしなければ、教会は成長する」ということです。

ヨシュアは今、主なる神が私たちに、主の民・キリスト者として歩み、教会形成するために、何が求められ、何を行ってはいけないのかを、語りかけようとしています。

ヨシュアの言葉に耳を傾けるイスラエルの民は、ヨシュアをとおして主なる神が働き、約束の地カナンが与えられていく姿を体験し、目の当たりにしてきました。その一つひとつを忘れてはなりません(3)。大宮教会も、コロナ禍、礼拝出席を制限し、交わりも制限される中、主は加入者・幼児洗礼者をお与えくださり、会計も満たしてくださいました。

うれしいこと、喜びだけではありません。世界におけるコロナの混乱、そして地震や水害といった自然災害や、戦争・迫害といった社会災害も、主は私たちに語りかけておられます。教会の成長、衰退・混乱も、私たちは主の御前に受入れることが求められます。主からの警告であれば、罪を悔い改め、主の御前に遜ることが求められます。他人に責任を押しつけている問題は解決しません。私たちは主の摂理・御支配の下に生きているのであり、主の関与していない所で、私たちに何かもたらされることは、何もありません。

主なる神が御言葉をもって語りかけることに耳を傾けなければなりません(6-8)。ここにおいては、イスラエルと異邦人との関係、つまり周辺諸国の偶像であるバアルとアシェルと交わることがあってはなりません。

そして現代に生きる私たちとしても、主がお語りになる律法、その代表としての十戒に聞くことが求められています。十戒の学びを行うにあたって、繰り返し語ってきていることですが、主はイスラエルを救い出してくださった後、主なる神を信じて歩むために十戒をお与えくださいました。そして主イエスがお語りくださった十戒の要約を忘れてはなりません(マタイ22:37-40、参照：ヨシュア23:11)。

そして、主の愛に満たされ、主に従って生きようとするイスラエル、そして私たちに対して、主は良い土地・良いものをお与えくださいます(13-16)。イスラエルは約束の地がどれだけ素晴らしい土地であったか実感したはずです。私たちは、日々の生活での主がお与えくださる恵みの一つひとつを数え上げることが求められます。さらに主は、私たちのために、御子をこの世にお送りくださり、十字架の御業により罪の赦しと天国における永遠の生命を約束してくださっています。天国に勝る良いものはありません。

主がお与えくださる恵み、良きものが、当たり前になり、感謝がなくなるとき、罪・サタンが入り込む余地をつくります(ヨシュアの警告：23:12-16)。

主なる神は、イスラエルや私たちが、律法である十戒を完全に守ることができないことを知っておられます。守れないことではなく、主から離れ去り、律法に関係なく生きるときに主の裁きを招きます。主は私たちに、常に主がお与えくださった恵みを忘れることなく、主の愛の言葉である十戒に聞き従って歩むことを望んでおられます(参照：ウ大教理問99)。

信仰の継承を考える時、焦ってしまいます。しかし私たち自身が、主の恵みに満たされ、感謝と喜びを持って生き続け、その喜びを伝えていくことこそが大切です。

【祈祷会奨励】「信仰を受け継ぐ」ヨシユア24章、ウエストミンスター信仰告白22:1-2 (1/12)

ヨシユア記23章では、ヨシユアも死期が近づき、次の世代に信仰の継承を行います。出エジプト、そしてカナン征服において主なる神が働いてくださり、イスラエルが守り導かれたことを覚えつつ、主の御言葉に聞き従って歩むことが求められていました。

そしてヨシユアは24章で、改めてイスラエルの民に言い聞かせます。表題で「シケムの契約」とありますが、シケムの町は、アブラハムの時代にすでに聖所があった場所です(創世記12:6)。そしてヤコブも土地を買い取り、祭壇を建てた場所です(創世記33:18~20)。つまり、ヨシユアはアブラハムを覚えつつ、アブラハムの時代からヨシユアによるカナン征服にいたるイスラエルの歴史を顧みます(2~13)。

私たちは、創世記からのモーセ五書、そしてヨシユア記を読み進むことによって、これらを確認することが求められています。つまり23章では、カナン征服において自分たちに示された主なる神の御業を顧みることを求め、私たち大宮教会に与えられた恵みを顧みることが求められました。しかし主の御業はそれだけではありません。天地創造からイスラエルの歴史があり、そして約束のメシアとしてのイエス・キリストが来られました。そして十字架の御業を成し遂げ、復活して天に昇って行かれました。その後、新約の教会の歴史があります。これら主の御業の全体像の中に、当時の彼らにとってはカナン入場があります。私たち大宮教会では、今年の恵みがあります。これらのすべての歴史が、主なる神のご計画と摂理に基づく歴史の中に刻まれていることを、私たちは知るべきであり、私たちが今生きていることも、この中に組み入れられているのです。

このことを受けて、続けてヨシユアは語ります(14~15)。エジプトにはエジプトの神々があります。カナンにはカナンの神々があります。日本には八百万の神々がいます。ヨシユアは、それらの神々を除き去り、主に仕えることを求めます。この14~15節だけを読むならば、主なる神をとるか、他の神々に仕えるか、二者択一のようなようです。しかし、主がすべてを御支配になり、そしてイスラエルの民にお与えくださった恵みをお与えくださったことを前提にして(2~13)、イスラエルの民・私たちに対して、選択することを求めます。

つまりここでの選択は、主がお与えくださった救いの御業を受入れ、主を信じ、主の御言葉に聞き従って歩むのか、それとも主の恵みを拒否して、他の神々を信じるのかということ(15)。ここで「他の神々を自分で選びなさい」と語られています。主なる神の恵みを拒否し、そして自分で偶像を拝みます。この結果、主の裁きをもたらされても、それは自己責任であり、救いをお示しくださった主の責任にすることはできません。「滅びの民をも予定される恐ろしい神である」、「なぜ神は、すべての人を救わないのか」とも言われます。しかし自分で主の恵みを否定した結果の主の裁きです。「可哀想だ」といった感情論で語られても、「主なる神を拒否した」事実を主はお許しになりません。

この時イスラエルの民は、「主を捨てて、ほかの神々に仕えることなど、するはずがありません。……」と答えます(16~18)。この時、主なる神はヨシユアをとおして語られます。「あなたたちは主に仕えることができないであろう。この方は聖なる神であり、熱情の神であって、あなたたちの背きと罪をお赦しにならないからである。もし、あなたたちが主を捨てて外国の神々に仕えるなら、あなたたちを幸せにした後でも、一転して災いをくだし、あなたたちを滅ぼし尽くされる」(19~20)。主なる神からの警告が発せられたことをイスラエルの民は、承知した上で、さらに「わたしたちの神、主にわたしたちは仕え、その声に聞き従います」(24)と答えます。

主の御前で誓うことは、厳粛でなければなりません(参照：ウエストミンスター信仰告白22:1~2)。つまり誓うことは、単に主を否定し偶像を礼拝する以上に、その重み・責任があります。今週の礼拝で、加入式・幼児洗礼式においても誓約を行って頂きました。これは本人だけではなく、大宮教会の会員全員が誓約してきたことです。他人事ではなく、自らも主の御前に誓約をしたことを、心に留めて頂きたいと思えます。そして、主の裁きに恐れるのではなく、主の御業の厳粛さを覚えつつ、主がお与えくださった救いの恵みに感謝と喜びをもって、主なる神を信じ、主の御言葉に聞き、信仰生活を歩んで頂きたいと思えます。主が私たちのお与えくださった罪の赦しと救いの契約は、破棄されることはありません。